役責。而得彼□解狀、郡司仰云、國衙仰云、官交易糸絹、調沽買絹、國仰穎、官修理檜皮、丁馬之雜役、宜令仰仕者。因茲日夜無分寸暇、何奉仕御庄例事。望請、被牒送國衙、免除件臨時雜役、將奉仕御庄例事、牒送如件。乞也衙察之狀、欲被免除任先例彼庄預并庄子等臨時雜役事。依功德莫以忍耳。仍副前司免除雜役符案文等、以牒。

承平五年十月廿五日　　小學頭僧（定宿）

檢校權少僧都（會理）　　僧（禪□）

別當大法師（神辨）　　僧

大學頭大法師（神鑒）

大學頭大法師（貞救）

（東寺百合文書）

本家の設定

爰季光舍弟小弓大夫惟光以所領號小弓庄、奉寄進本家於御堂關白之時、○中略改橘惟光、令寄進件庄。于今爲近衛殿御領。惟光以水田、寄進上東門院御願東北院領。號上東門院勅旨田。爲攝籙家渡庄。於領主職者、惟光之子孫于今相傳之。立木田大夫季高奉寄進所領於陽明門院御領。仍號陽明門院勅旨田。同時又奉寄進所領於院御領。號後三條院勅旨田是也。兩所領主職、共以彼子孫當知行。（良米氏系圖）

第四節　院政

後三條天皇朝政の御改革

一後三條天皇の御改革　藤原道長は、久しく樞要の地位を占め、榮耀榮華を極めたが、その子頼通もまた久しく關白となり、藤原氏の權勢は實に華々しいものがあつた。しかしながら、その頃中央政治の紀綱は弛み、地方政治は亂脈に陷り、班田制は行はれず、莊園の激增を見るに至つた。後冷泉天皇のちを承けて後三條天皇が立ち給ふや、天皇は深くこの狀態を軫念あらせられ、時弊の基づくところは一に攝關政治にあることを察し給ひ、新たに源師房・俊房の父子、藤原實政・大江匡房を起用せられ、綱紀を振肅して、萬機をみそなはし給うた。天皇は、東宮にましますこと二十餘年、藤原氏の專横を憂ひ給ひながら、心靜かに故實典禮を修め、時の來るのを待ち給うたのである。殊に天資剛邁にましました上に、天皇の御母は、三條天皇の皇女であらせられ、從來の如く藤原氏との外戚の親もなく、御卽位後は藤原氏を憚らず庶政の改革を斷行し給うた。この時頼通は、既に宇治に屏居し、弟敎通が關白の

職にあつたが、藤原氏の權勢は既に昔日の面影を失つたかの感があつた。

天皇は、勵精治を圖り給ひ、まづ權門勢家の擅權を抑制するには莊園の整理を以て急務なりと思し召され、その初政に於いて諸國新置の莊園を停止し、ついで記錄莊園券契所(略して記錄所と云ふ)を太政官に設けて、莊園の券書を諸家に徵し、その虛實を調査せしめて、嚴に莊園を整理せしめ給うた。さらに地方政治の刷新を志し給ひ、國司の重任を禁じ、著々新政を布き、綱紀を振肅し給うた。

院政の御意圖

かくの如く天皇は、鋭意宿弊を改革せんとし給うたが、道長以來の藤原氏の權勢なほ大にして、賴通はわざと券書を提出せず、敎通は强ひて國司の重任を請ふなど不遜の行動が少くなかつた。天皇は、御在位五年にして御病氣のために御子白河天皇に讓位し給うたが、のち僅かに五箇月にして崩御あらせられた。朝野はひとしくこれを惜しみ奉り、賴通も天皇の御英邁に服し奉つてゐたので、朝家の不幸これより甚だしきはなしと歎き奉つた。

二院政の創始

白河天皇は、御父後三條天皇の御氣象を受けて剛毅果斷の政を行はせられ、且つ御卽位の初め賴通・敎通相次いで歿し、攝關政治は全く昔日の力を失ふに至つた。かくて後三條天皇の御遺業たる攝關抑制はこの御代に至つて實現せられた。白河天皇は、御在位十四年にして應德三年(一七四六年)堀河天皇に讓位し給うたが、爾來上皇として政を院中に聽き給ふこと四十三年の久しきに及んだ。これより院政は世々の慣例となり、その政務を行ふ所を院廳(ゐんのちやう)といひ、別當以下の院司(ゐんのつかさ)をして事に當らしめ、院宣を以て天下に號令し給うた。白河上皇は、堀河天皇・鳥羽天皇・崇德天皇の御三代に亙り、鳥羽上皇は、崇德天皇・近衞天皇・後白河天皇の御三代二十七年間、後白河上皇は、二條天皇・六條天皇・高倉天皇・安德天皇・後鳥羽天皇の御五代三十四年間の久しきに亙つて引續き院政をみそなはし給うたのである。

かくて攝關家政所の政務は院廳に移り、これによつて弛緩した中央政治の綱紀は一時緊張するの感があつたが、政治の成果は必ずしも擧がらず、政局を複雜ならしめ、遂に保元・平治の亂が起り、武家の擡頭を招くに至つたのである。

武士の進出

三武家の興隆　中央の朝臣が太平を謳歌してゐる時、地方には武士が發生しつつあつたことは既に前に述べたが、朱雀天皇の天慶年間平將門が東國に同族と爭つて、やがて叛を圖り、藤原純友が西國に海賊を働いて暴威を振るつたことは、地方武士の騷亂が中央を驚かした最初の事件であつた。そしてこの亂の鎮定に功のあつたのは、平貞盛・藤原秀郷・源經基等の武士であつたが、それは國内治安の維持が武士の力に俟たねばならぬことを明らかにしたものであつて、武士の勃興はいよいよ助長された。これら武士の中では桓武天皇の皇子葛原親王の後裔たる平氏と、清和天皇の皇子貞純親王を祖とする源氏とが最も勢力があつたが、平氏は將門を出したのに反して、源氏の方は經基の子滿仲、孫頼光・頼信がいづれも有爲の人材であり、相次いで攝關家に出入してその信任を得、武名を一世に轟かしたので、早くも源氏の勢威は平氏を凌ぐに至つた。しかも後一條天皇の御代、平忠常が東國に亂を起した際、頼信は勅を拜して、子頼義とともにこれを平定し、ここに源氏の威望はいよいよ揚つた。また後冷泉天皇の御代、頼義は前九年の役、卽ち陸奥の豪族安倍氏の叛亂を鎮定し、その子義家は、堀河天皇の御代、後三年の役、卽ち出羽俘囚の長清原氏の亂を平げて功を立てたので、源氏の勢力は平氏に比して壓倒的な勢威を得るに至つた。

源氏の擡頭

なほこの戰の間にも頼義・義家は、武門の棟梁として、一族・郎等の師表たるの貫祿を示し、また庶民をねぎらつて善政を布き、慈愛を施した。義家はまた文武の道を兼ね修めるなど眞に武士の鑑と讃へられた。かくて源氏の武威は朝廷にまで聞え、義家は院廳の警護を命ぜられ、北面の武士として勢力を中央に進めるに至つた。源氏は東國地方に勢力を扶植し、やがて頼朝が關東に據つて幕府を開設するに至つた萌芽は、早くもこの頃に培はれたのであつた。

平氏の勃興

かくて地方より起つた武士は、遂に院中に用ひられるに及んでやうやく中央に進出するを得た。しかして源氏の勢力は、義家に至つてその絶頂に達したが、その後を嗣ぐべき將才のあるもの少く、且つ内訌もあつてやうやく振るはなかつたので、これに代つて平氏の勢力が擡頭した。天慶の亂に

功のあつた平貞盛の子維衡は、伊勢にあつてその子孫を伊勢平氏と稱したが、この流より出でて剛勇の聞え高き忠盛は、白河法皇・鳥羽法皇の院中に用ひられ、再度瀬戸内海の海賊を討ち平げ、源氏の東國を根據とするに對し、西國にその勢力を扶植した。なほ忠盛は、當時都で暴力をほしいままにしてゐた南都北嶺の僧兵を追捕し、また鳥羽法皇の得長壽院その他の寺々の造營にあづかつて力を致し、特に内昇殿を許され、遂に正四位上・刑部卿にまで進んだ。かくて忠盛の子清盛の時に至つて、平氏の威望は遙かに源氏を凌ぎ、その全盛時代を現出するに至つた。

公武の爭亂

院政を機緣として、武士が中央進出の機會を與へられたのみならず、藤原氏一族の内訌が誘致された。即ち武士が京都に勢威を進めるに從つて、攝關の實權は有名無實となつたが、なほその名爵の貴きのみならず、この職に就くものは、氏長者として同族を支配し、殊に殿下渡領として攝關の襲承すべき莊園什寶を獲得するを以て、その地位爭奪の競爭は常に絶えなかつた。加ふるに武家は中央進出に際して、或は院中に近づき、或は攝關と結託して自家勢力擴張の具に供したので、中央の情勢はやうやく複雜化し、同族相食むの醜態を呈するに至つた。されば藤原氏は、傳統を重んじて御所に出仕する一派と、新興勢力を仰望して院廳に仕へる一派とに別れ、これらの二派が各自派武士と協力して對立し、抗爭する形勢が現はれた。

かかる抗爭は藤原氏の勢力を分裂せしめ、その衰運を促進して武家興隆の誘因となつた。後白河天皇の御代に起つた保元の亂は、かかる情勢に拍車をかけたものであつた。

保元の亂

保元の亂の原因は、藤原氏の内部に於ける勢力の抗爭によるものである。藤原氏に於いては忠實とその子忠通・忠通とその子頼長との間に不和があり、これが權勢の爭奪となり、しかも源平二氏の武力を背景として忌はしき結果をもたらした。即ち藤原氏一族間に攝關の地位を望み爭つて、骨肉相食み、兄弟墻に鬩ぎ、延いては累を皇室に及ぼし奉り、源平の武士またその渦中に投じ、互に殺傷し、名分を蔑如し、倫常を破却し、實に空前の亂脈を極めた。かくて公家内部の對立が暴露し、一方武家の勢力は躍進し、ここに舊勢力は

衰頽し、新勢力の勃興を見たのである。この亂後、戰功者として清盛は播磨守に、義朝は左馬頭に任ぜられた。これより時代は轉換して武家の世となり、源平二氏の抗爭が激化するに至つた。

平氏の興亡

四平氏の興亡　保元の亂が鎮定せられるや、後白河天皇は親しく政をみそなはし給ひ、藤原通憲（信西）を用ひて、或は記錄所を設け、或は大内裏を造營し、その他、朝儀を再興あらせられ、大いに朝威の伸張を圖り給うた。保元三年（一八一八年）天皇は位を二條天皇に讓つて院中に政を聞し召され、忠通は關白を辭し、その子基實がこれに代つた。通憲は、博學宏才にして廟堂に勢力を有してゐたが、たまたま藤原信頼の近衞大將たらんとするの望を妨げたので、信頼は深くこれを恨みとした。また源義朝は、平清盛が通憲に款を通じてその威勢日に盛んなるを見て、心中快からず、源氏の再興を期してゐた。されば平治元年（一八一九年）信頼と義朝とは結託して清盛父子の熊野參詣の不在に乘じて俄に兵を擧げ、内裏に於いて除目を請ひ奉り、信頼は大將に、義朝は播磨守となつた。通憲は、大和に潛れたが、遂に發見せられて自殺した。清盛父子は、路にこの變報を聞き、直ちに馳せ歸つて信頼・義朝の軍を攻めて、大いにこれを破り、信頼は斬られ、義朝は東國に逃れんとして尾張で殺され、頼朝以下一族は盡く罪に服した。ここに源氏の勢力は一掃せられ、平氏は獨り全盛を極め、遂に政權は公家の手を離れて武家の手に移つた。

平氏の榮華

清盛は、平治の戰功によつて從三位に敍せられ、仁安元年（一八二六年）内大臣に進み、翌二年には從一位太政大臣に陞つて位人臣を極めたが、間もなく病のため辭任し、入道して淨海と號した。しかしながら清盛の榮華は、これを以て終つたのではなく、仁安三年には女を宮中に進めたことを始めとし、その一門また朝臣に列して、樞要の地位を占め、一族の公卿たるもの十數人、殿上人は三十餘人の多きに及び、その知行の國は三十餘國、莊園は五百餘箇所を數ふるに至り、平氏の榮華は藤原氏のそれに彷彿たるものがあつた。

しかも平氏の武威は、遂に院政の前途をはばみ、藤原氏にも增した擅恣不遜の行爲があつた。後白河法皇の側近は、かかる專横を抑へんとして、治承元年（一八七三年）には藤原成親等が鹿ケ谷に會合して密謀を回らしたが、事露は

鹿ケ谷の會合

れて挫折した。清盛は激怒の餘り成親の黨與を盡く捕斬せんとしたが、重盛はこれを諫め、私怨を以てみだりに朝臣を殺すの非を說いて、成親を備前に、俊寬等を鬼界島に流した。

平氏の滅亡

これより清盛の横暴はいよいよ募り、殊に重盛の歿後、他に憚るところなく振舞ひ、遂には皇威を輕んずるに至つた。されば源三位頼政は、清盛の專横を抑へんとし、密かに平氏の討伐を謀つた。治承四年四月以仁王を奉じて平氏追討の令旨を請うて、これを諸國の源氏に傳達し、園城寺・興福寺の僧徒もこれに應じ、擧兵の計畫は著々進められた。しかるに、その募兵の未だ集らざるうちに事露はれ、頼政は平氏の追擊を受けて宇治平等院に自刄し、以仁王は流矢に中つて薨ぜられた。しかし南北の僧徒はますます動搖し、加ふるに諸國に散在せる源氏は、令旨を奉じて蜂起し、平氏の前途はやうやく多事ならんとするに至つた。

源氏の擧兵

この時、伊豆に久しく蟄居してゐた頼朝が外舅北條時政と謀つて兵を擧げるや、源氏恩顧の東國武士はその傘下に馳せ參じ、相州鎌倉に據り、その勢力は次第に强大となつた。これに反して、平氏に非ざる者は人に非らずと誇つた平氏は、朝廷に對しては順逆を誤り、政治に與つては、武士の本領を忘れて公家の亞流に墮し、平氏衰運の兆は、最早蔽ふべくもなかつた。されば平氏の諸將は源氏の猛將に抗し得ず、いづれも破れて都に還り、形勢日に非となつた。かかる間に、清盛は病にかかつて遂に歿し、平氏の勢はますます衰へるに至つた。

頼朝が石橋山に戰ふ頃、源義仲も木曾の山中より出でて兵を擧げ、越中より近江路を經て比叡山に陣し、將に京に兵を進めようとした。清盛の子宗盛は大いにこれを恐れ、遂に天皇を奉じて西國に奔つた。義仲は勢に乘じて源行家と相前後して入京したが、その將兵は節度を缺き、行狀は粗暴にして不遜の行爲を重ねるに至つたので、法皇は義仲追討の密旨を頼朝に下し給うた。頼朝は範頼・義經をして義仲を討たしめたので、さしも剛勇を謳はれた義仲も遂に敗れて粟津原の露と消えた。

かかる間に一旦九州に落行きし平氏は、再び兵力を得て東上し、やがて京

都に迫らうとしたので、源氏の大軍はこれを邀撃して大いに破り、逃ぐるを追つて或は一谷に、或は屋島に敵の軍勢を挫き、遂に平氏は壇浦に一族を擧げて滅亡した。平氏の榮華は僅かに二十年、槿花一朝の夢と消え去つたが、その衰亡は大義を忘れて名分を正さず、武士の本領を忘れたに原因する。

第五節　外交と貿易

遣唐使の派遣

一日唐交通の推移　平安初期の日唐關係は、前代のそれの繼續であつた。桓武天皇は、國内庶政の改革に御力を注がせ給うたので、遣唐使の派遣もしばし途絶えたが、延暦二十年（一四六年）藤原葛野麻呂を大使に任じ、同二十三年に唐に遣はされた。この時葛野麻呂は、數ある俊才の中でも後世にまでその名を謳はれた橘逸勢・僧最澄・空海を同行した。ついで平城天皇・嵯峨天皇・淳和天皇の御三代は、文運のいよいよ興隆した時代であつたが、當時唐に於いては、さきに安史の亂が勃發して國運は衰頽の一途をたどつてゐたので、遂に遣唐使派遣のことはなかつた。天長十年（一四九年）仁明天皇御即位あらせられるや、翌承和元年藤原常嗣を遣唐大使に任ぜられた。大使の一行は、同三年出發し、同五年やうやく渡航することを得、翌六年歸朝した。そのうち宇多天皇の寛平六年（一五五年）菅原道眞が遣唐使に任命せられたが、時既に唐の國勢は衰へて騷亂を極め、文化もまた見るべきものがなかつたので、もはや巨額の費を拋ち、風浪の險を冒して通交するの無益なるを悟り、天皇は道眞の建議を容れて、遣唐使の派遣を停め給うた。推古天皇が始めて小野妹子を隋に遣はされてより、この時に至るまで實に二百八十七年の長きに亙つた。間もなく醍醐天皇の御代に唐は滅亡し、彼我の國交は永く絶えてしまつた。

遣唐使の廢止

この時代に於いても前代と同じく、遣唐使派遣の目的は、國威を海外に宣揚し、兩國の親善及び文化の交流を圖るにあつたから、その人選には特に注意が拂はれ、學識才能ある官吏が選ばれた。されば遣唐使はよくその使命を果したが、これとともに唐文化の輸入にも少からぬ貢獻をした。また多くの留學生・學問僧が同行して彼の地に赴き、艱難辛苦を嘗めて修學求法に

努め、彼我文化の交流に大なる功績を遺したが、その中で特に銘記すべきは、眞如親王の御事蹟である。

眞如親王

親王は、平城天皇の皇子高丘親王であらせられるが、弘仁十三年（一四八年）佛門に歸依し給ひ、名を眞如と改め、東寺に入つて空海に就いて佛法を修められた。求法の御志厚く、貞觀三年（一五一年）入唐を願ひ出でて勅許を得られ、翌四年五月その途に上らせられ、九月浙江省寧波に著き給うた。親王はこの附近に滯留せられることと約二年、貞觀七年長安に赴き、およそ半歲にしてさらに印度へ向はせ給うた。すなはち親王は、まづ南下して廣州に赴かれ、ついで印度行の途に上らせられたのである。そののち親王の御足跡は杳として判明せず、陽成天皇の元慶五年（一五四年）に至つて、支那留學中の僧仲璀が朝廷に申狀を上り、眞如親王は、羅越國で遷化し給うたと奏聞した。羅越國は今のマライ半島の南端であるといふ。親王はこの時既に七十に近き高齡であらせられたが、單身この壯擧を決行し給ひ、遂に御骨を異境に埋めさせられたのであつて、その御氣魄はまことに感激のほかなく、眞に懦夫をして起たしめるの概ありと申すべきである。

日唐交通

かくて日唐の國交は多くの業績を遺しながらも、遣唐使の廢止によつて停止せられたが、彼我の間、私の交通はなほ行はれたのである。この交通は主として唐の商船によつて行はれ、我が留學僧もしばしばこれらの船に便乘して渡唐したのであつた。唐の商船が博多に入港すると、太宰府はこれを京師に報じ、唐商人は鴻臚館に入り、京都からは交易唐物使が派遣せられて交易を行つた。この時、私人の貿易はこれを禁止したが、實行は困難であつた。しかしてこれらの唐商によつて舶載せられた珍奇な物品は、貴族の嗜好に叶ひ、その生活の内容を豐富ならしめた。

新羅との關係

二滿洲及び半島との關係　新羅の我に對する公的使節の派遣は、奈良時代を以て終つたが、我が國では、この時代に入つても遣唐使船の往來に關して新羅に使節を派遣したことがあり、また新羅商人は、引續き來航して貿易を行つた。我が國はこれらの商人に保護を加へ、貿易の振興を圖つた。しかるに新羅の國政が亂れるや、不逞の輩はしばしば我が沿海に出沒し、航路の

安全を脅したので、我はこれに對し西邊の防備を嚴にして備へた。たまたま寛平六年（一五五四年）賊船對馬に來寇したが、對馬守文室善友は、奮戰してこれを擊退することができた。こののち新羅の國政はいよいよ亂れ、遂に王建が國を建てて高麗と號し、朱雀天皇の承平五年（一五九五年）には新羅に代つて半島を統一した。

高麗との關係

王建が半島を統一するや、我が國に使を派して入貢せんことを請うたが、我が國はこれを許さず、ために正式の國交は開けなかつた。しかるに白河天皇の御代の頃より私の貿易が盛んとなり、それに伴なうて文化の交流も行はれた。

渤海との關係

渤海は奈良時代以來約二百年の間、しばしば我が國に使者を派遣して朝貢を怠らなかつた。桓武天皇の御代、一度六年一貢の制を定められたが、渤海はその遲きを憚ると稱し、期間の短縮を請うた。こののち渤海の入貢は頻繁を極め、我が國ではその送迎の煩に堪へず、淳和天皇の御代藤原緒嗣の建議によつて、十二年一貢の制を定め給うた。しかし渤海は、必ずしもこれに從はなかつたが、朝廷ではその期に違ひ朝貢するときは、これを責められた。かくて渤海は遣唐使廢止後も我が國と修交を續けたが、唐の滅亡後間もなく、醍醐天皇の延長四年（一五八六年）に、新たに勃興した契丹のために滅ぼされ、遂にその地方との交通も杜絶した。

刀伊の入寇

契丹は渤海の故地に州縣を置かず、ただ外部から牽制するのみであつたから、靺鞨族は、女眞の名で新たに頭を擡げ始めた。女眞は幾多の部族に分れて、統一がなく、半牧半農の民として奔放な生活を營んでゐた。その分布地域は咸鏡道の永興以北、平安道の東北部、鴨綠・豆滿二江の流域、松花江の全流域、黑龍江の下流域に及んだ。そして彼等は、しばしば海賊となつて高麗の東海或は南岸に寇してゐたが、後一條天皇の寛仁三年（一六七九年）には、遂に我が國にも及び、五十餘艘の船舶を連ねて、まづ對馬・壹岐の二島を侵し、ついで博多灣に迫つた。この時太宰權帥藤原隆家は、部下將士を率ゐてこれを邀擊し、寡兵よく賊船を斥け、國威を辱しめなかつた。この事件は泰平に狎れた都人を震駭せしめたが、一方外寇に際しては、國民の心が振起し、外敵をし

て神洲の地には一指をだに觸れしめざるを示したものであつた。高麗時代に半島では女眞のことを刀伊と稱したので、世にこれを刀伊の入寇といふ。

日宋貿易

三宋との交通　遣唐使の廢止後も日支兩國の間に商人・僧侶の交通は頻繁に行はれた。醍醐天皇の延喜七年（一五六七年）に唐は亡び、宋の興るまで五十三年間、いはゆる五代（後梁・後唐・後晉・後漢・後周）の諸國が忽ち興り、忽ち亡び、その他邊境には群雄が割據して互に抗爭し、國民は疲弊の極に陷つた。その間にも日支交通は行はれ、商船の來往はかなり頻繁であつた。殊に吳越の領域であつた明州・越州地方は、古來日支交通の關門であつたので、從來の經驗に基づき貿易が行はれたのである。即ち吳越國は、國書を我に送つて國交を希望したが、朝廷は正式の返書を遣はされず、大臣の名を以て返書を與へられた。これ卽ち支那邊隅の小國たる吳越の地位をよく認識し、敢へて國交を行ふを潔しとしなかつた我が矜持を示すものである。

入宋僧

ついで村上天皇の天德四年（一六〇年）宋の太祖は、支那を統一したが、これより我が國と宋との關係は、宋商船の來航と我が入宋僧の活動とによつて保たれた。宋代三百十餘年間は、政治上に於いて北宋・南宋の二時代に分たれる。北宋時代は我が藤原氏全盛の時代であり、南宋時代は武家興隆の時代である。藤原氏の全盛期には邦人の私に海外へ渡航することは禁止せられ、來往の商船は外國船舶に限られ、頗る退嬰的であつた。しかるに、武家の興隆するに伴なつて果然進取的となり平淸盛の如きは大いに海外貿易を奬勵した。

貿易の仕法

日宋貿易の仕法は、日唐貿易のそれと同樣であつて、年々歲々商船を來航せしめた。一條天皇の頃から年紀を定めて來航すべき官符を交付したが、利潤を求めて來航する宋商は、年紀を待たずして來船するものが多く、かかる場合は來航の宋船をそのまゝ歸帆せしめた。さればのちには歸帆を免れるため、漂流と稱して來朝するものが多くなつた。宋船が博多に來航するや、太宰府はこれを京師に報じ、朝廷の命を受けて博多で交易が行はれた。

交易品

貿易品の中、主なる輸入品は、錦・綾等の織物、香藥・茶碗・蘇芳・筆墨等で、輸出品は、

唐末五代に於けると同樣に砂金・水銀・綿・絹布等であつた。そのほか我が國より金銀蒔繪・螺鈿の調度品・扇・屏風・刀劍等が輸出せられたことは、我が文化の海外進出を物語るものであり、我が藝術の優秀性を遺憾なく示すものである。

學問僧

次にこの頃學問僧として宋に渡りその名を遺した者は、約二十名程數へられる。これらの人々は入唐僧とその趣を異にしてゐた。即ち入唐僧は新宗旨を學び、新法門をもたらすことを念としたが、入宋僧の多くは、自己の罪障消滅・往生菩提のために佛蹟を巡拜するのを目的とした。從つて文化的交渉に於いて、宋文化の輸入よりもむしろ我が文化を輸出することが多かつた。けだし唐・宋・五代の擾亂を經て、彼の文化は衰頽したが、我が國では太平の世が打ち續き、固有文化はますます洗練せられ、彼我の地位が全く顚倒したことによるものである。齊然の如きは、圓融天皇の永觀元年に入宋し、太宗に謁して我が職員令・年代記各一卷を獻じ、我が皇室の萬世一系なることを誇つた。そのほか佛教の教義に關する書が支那に輸出され、我が佛教の興隆を誇示した。

清盛の貿易奬勵

我が國と南宋との關係は、平清盛が出づるに及んで活況を呈した。清盛は、保元の亂鎭定の功により太宰大貳となり、博多地方を管するや、日宋貿易の利益あることを察し、大いにこれを奬勵した。彼は新興武家の進取的精神により、或は兵庫港、或は音戸の瀨戸の改修を行つて航海の便を圖つた。かくて日宋貿易は次第に盛んとなつたが、この頃より宋の文化はやうやく興隆し、それはやがて我が國にも取入れられた。

吳越船の來航

○廿六日　○天慶八年七月　庚申、今日、唐人來著肥前國松浦郡柏島狀。仍大宰府言上解文在左。

其文多不載。只取其大綱。

大宰府解申請官裁事。

言上、大唐吳越船來著肥前國松浦郡柏島狀。

船壹艘、勝載參仟斛、乘人壹佰人交名在別。

一船頭蔣袞　二船頭俞仁秀　三船頭張文遇

右得管肥前國今月十一日解同日到來�、管高來郡肥最埼警固所今月五日解狀、同月

十日亥刻到來云、今月四日（▼▼）三刻、伴船飛帆、自南海俄走來。警調兵士等、以十二艘追船留肥最埼港島浦。 爰五日寅一刻、所司差使者問。 所送牒狀云、大唐吳越船、今月四日到岸。 伏請准例連差人船、引路至鴻臚所、牒者、慥加實檢、所申有實。 仍副彼牒狀、言上如件者云々。 蔣袞申送云、以去三月五日、始離本土之岸。 久□滄海云々。

天慶八年六月廿五日　（本朝世紀第七）

第六節　國風文化の成熟

平安時代の文化

一、概觀　平安時代の文化は奈良時代ののちを承け、その初期凡そ百年はなほ唐風文化が隆盛であつたが、内外の情勢が安定するに伴なひ、唐風文化隆盛の風潮も薄らぎ、唐文化を融合同化した日本獨自の文化の發展が極めて顯著となつた。 これを政治組織の上に見れば、律令制度の國家の實情に適せざるものを改廢し、我が慣習法の發達を促し、これを佛教の上に見れば、天台・眞言の兩宗が新たに興つて前代に於ける政教混同の弊を絶ち、日本佛教の獨立を見るに至つた。 しかして佛教の國風化は、當代中葉以降の淨土教の發展に於いてさらに顯著に示されたのである。 文學に於いても、當代初期には漢詩文が榮えたが、藤原氏が勢力を得た頃より國文學が興隆し、歌集の勅撰、物語の創作が行はれ、源氏物語の如き傑作が現はれた。 その他の藝術に於いても、優雅纖麗のうちに日本趣味の興起が著しく、住宅の寢殿造、寺院の阿彌陀堂の如きは、人工を自然の中に融合せしめた日本的な藝術美を最も端的に表現したものと言へる。

かやうに當代は、前代以來盛んに攝取した唐文化を、我が國獨自の精神によつて醇化し、やがて豐潤な日本文化を創造した時代として注目される。

神祇崇敬

二、思想と宗教　我が國固有の神祇崇敬の風は、外來文化攝取の盛んな時代にあつても聊かも衰へることなく、奈良時代にも幾多の神祇尊崇の事實があつたが、桓武天皇もまた叡慮をここに留め給ひ、神祇制度を肅正し、祭祀を嚴修し給うた。 また祈年祭に幣帛を奉られる神社について官幣國幣の制を設け給うた。 こののちも、御歷代神祇を敬ひ給ふこと厚く、諸國の主なる神社に、或は神階を授け、或は官社に列せしめられることが行はれた。 既に

神祇制度の確立

大寶令の中に神祇制度の大本が定められたが、國家の發展とともに百般の事務はますます複雜となり、さらに詳細なる法規を必要とするに至つた。醍醐天皇の御代に延喜式が撰修せられたが、その延喜式五十卷の中、最初の十卷は神祇に關する部で、極めて詳細な規定が定められ、また官社として祈年の奉幣に與る神社凡て三千百三十二座二千八百六十一社が載錄せられた。これらの官社は、官幣に與る社と國幣に與る社とに分れる。官幣は神祇官より幣帛を上り、國幣は國司が代つてこれを行ふものである。官社名を載錄した延喜式の卷九・卷十の二卷は神名帳と稱せられ、そこに載せられた官社を式内社と呼ぶ。かくて恒例の祭祀に奉幣される官社は諸國に遍く設けられたが、當時一般官社の制のほかに立ち、特に朝廷の御尊崇あらせられた若干の神社があつて、これらの神社は、當代の末葉に至つて遂に二十二社の制を見るに至つた。

かくて神祇制度は大いに整備せられたが、平安時代の中頃以降は、一般に政治機構が紊れたので、神祇制度もまた必ずしも延喜式のままには行はれず、種々な便宜的な制度が現はれた。例へば、國司が赴任すれば國内の式内社を巡拜する例であつたが、この頃より國府の附近に諸社の神靈を合祠して總社と稱し、巡拜奉幣の煩を避けたが如きはこれである。京都の諸社の祭祀は、年とともに盛んとなり、その神事は世俗の推移とともに華美に流れ、實質よりも形式を崇ぶに至つた。

佛教界の肅正

次に佛教について見るに、前代に於いて遂に教混同の餘弊を生じ、光仁天皇は、これが肅正に努め給ひ、ついで桓武天皇もまたさらにその徹底を圖り給うたことは、既に述べたところである。ここに於いて佛教界に革新の氣運が鬱然として興り、最澄による天台宗、空海による眞言宗が開かれた。

天台・眞言兩宗の特質

しかして天台・眞言兩宗はいづれも鎮護國家を以てその使命となし、大陸の佛教とその根本義を異にしてゐた。このことは、從來も信仰の上には現はれてゐたが、これを明瞭に教義の上に顯示したことは、最澄・空海その人の國家的精神の顯現であると言はなければならない。即ち從來の如き支那佛教そのままを移した教義より離れて極めて國家的精神に富み、且つ皇室尊

崇の精神を鮮明にした日本佛教が勃興したことは、當代國民の間に國家的自覺の盛んであつたことの反映である。

最澄ののちには圓仁・圓珍、空海ののちには眞雅・眞濟等の高足が多く出で、いづれも鎭護國家の重きに任じ、二宗ともに著しき發展を遂げたが、やがて當代中葉頃よりやうやく國家的性格を失ひ、專ら個人の安心立命のために加持祈禱を修する風潮が生じた。即ち最初新興の意氣に燃えた天台・眞言の兩宗も、貴族の信仰生活に深く浸染するとともに、僧侶は貴族によつて生活を保證せられ、寺塔もまた貴族によつて維持せられたので、鎭護國家を目的とした佛教は、貴族の一家繁榮・子孫繁昌の祈禱を修するものと化し、甚だしきは寺院にして貴族の別宅となれるものがあつた。忠平の法性寺、爲光の法住寺、兼家の法興院、道長の法成寺、賴通の平等院などはその代表的のものである。さらに佛事の遊戯化・享樂化もこれに伴なひ、神社の祭禮ともに貴族の間に行はれるに至つた。

藤原氏擅權の頃より、貴族社會の精神の弛緩が甚だしくなり、人心の不安動搖を生じた上に、かかる際に光明を與ふべき職責を有する宗教界の墮落は、當時の人々をして佛說に所謂末法の世が近づいたことを一入切實に感ぜしめた。かくの如き人心の不安や或は世の要請に應じて勃興したのが淨土思想であり、それによつて開宗せられたものが淨土宗である。

末法思想

淨土思想

淨土思想は、早く飛鳥時代に傳來せられたが、佛教が主として現世を對象とした宗教として受容せられたために、一般には行はれなかつた。しかるに、平安時代に入つて上述の世相に應じて、淨土思想が勢力を得るに至つたのである。村上天皇の頃、空也上人が念佛の功德を唱へ、これを市井の間に弘め、念佛興隆の氣運を作つた。空也についで源信(惠心)は天台の良源の門に出で、往生要集を著はし、淨土信仰の典據を定めた。ついで良忍は、融通念佛を唱へて上下に勸化し、念佛が一宗の形を取るに至つた。かくて淨土思想は大いに盛んになつたが、源空(法然上人)が出るに及んで、始めて淨土の教義を大成して淨土宗を確立した。淨土宗は當時の人心の要求に投じて忽ち上下の信仰を獲得し、寺院には阿彌陀佛を本尊としてまつり、民衆佛教の

興隆する端が開かれた。本宗の開立は我が國佛教獨立の顯著なる具現であつた。

本地垂迹說

これよりさき、佛教傳來の初めには、神祇思想と佛教思想とは相容れないものがあると考へられたが、奈良時代に至つて兩者は次第に融合し、さらに當代に於いては、遂に佛は神の本地であり、神は佛の垂迹であるといふ本地垂迹說が興つた。この神佛習合の思想は、佛教が日本化する過程を示すものであり、さらに佛教に對する信仰が國民生活の上に確固たる基礎を置くやうになつたことを示すものである。

陰陽道

平安時代の宗教的事象として、なほ陰陽道と修驗道とがある。陰陽道は、支那に發生した陰陽五行說に基づく迷信や方術を內容とするものであり、かねて天文・曆と密接な關係を有する。早くより我が國に傳はり、令の制度では中央政府に陰陽寮を置き、太宰府に陰陽師を置いて、これに關する事項の處理に當らしめた。しかるに、當代中頃より世相の惡化に伴なひ人心の不安が加はるに從つて、陰陽道に基づく信仰・方術の力が頓に勢ひを增し、或は歲・日の禁忌を說き、或は方位・物忌の說を立てて祭祀・祓除を行ひ、以て招福攘災の方法を講じた。そして民間にこれを以て生活する陰陽師が輩出し、國民の日常生活に深い影響を及ぼした。

修驗道

修驗道は、佛教の山嶽修行の風習や、道教の神仙思想や、陰陽道の方術等が從來民間に行はれてゐた呪術に關する種々の行法と結合して一種獨特の宗教となつたものである。文武天皇の御代、役小角が大和葛城山に住して鬼神を使役し、怪奇な所行をなし、その他人心を惑はす者が相踵いで出たので、これを禁止せられたことは、修驗道の起源の古きを物語つてゐる。當代に入つて、天台・眞言兩宗の如き所謂山嶽佛教が興起し、密教の加持祈禱等が行はれるに及んで、修驗の行法がこれに結合してから修驗道は大いに發達するに至つた。

學問の興隆

三學問と文學　平安時代に於ける學問・文學は依然として大學を中心として發達した。明經道では三傳・三禮・孝經等が主として行はれ、桓武天皇や仁明天皇は殊に經學を重んじ給ふた。明法道では律・令の研究が行はれ、朝廷

でも法典の編纂がしばしばあり、弘仁格式・貞觀格式・延喜格式等の成立を見た。支那律・令研究の盛行につれて、淸原夏野等は淳和天皇の勅を奉じて令義解を撰し、元慶の頃惟宗直本は令集解・律集解各三十卷を私撰した。文章道は紀傳道とも呼ばれ、史記・漢書・文選・日本書紀等によつて歷史・文章が學習せられた。奈良時代以來詩文が貴族の敎養として最も重んぜられたため、文章道は三道(明經・明法・算)を壓して隆昌を來たし、文章博士は他の諸博士に優つて地位高く、又官吏登庸試驗の如きも文章の巧拙によつて及落を決するやうになつた。

好學の風尙

平安初期に於ける政治的革新と有能者登庸の政策は、貴族に好學の風を喚起せしめた。この氣運に乘じて、有力な貴族はそれぞれ寮を建てて大學の別曹とし、その子弟を敎育した。和氣廣世の弘文院、藤原冬嗣の勸學院、橘氏公の學館院、在原行平の奬學院等はその主なるものである。この間、空海は庶民敎育を目的として綜藝種智院を開いたが、空海の示寂後その志を繼ぐもの無く、開校後二十四年にして閉鎖したのは惜しむべきである。

國史の編纂

學問隆昌の雰圍氣の中にあつて、勅撰の史書は前代に引續いて續々と編纂せられ、桓武天皇の御代から醍醐天皇の御代までに續日本紀・日本後紀・續日本後紀・日本文德天皇實錄・日本三代實錄が撰修せられた。書紀と併せて六國史と稱せられる。嵯峨天皇の御代には新撰姓氏錄の如き系譜ができ、菅原淸眞は六國史の事項を類別して類聚國史の大著を編纂した。

漢詩・漢文學

詩文の盛んなることは前後にその比なく、詩人・文人の輩出に伴なつて勅撰集が相次いで成り、嵯峨天皇の御代に凌雲集・文華秀麗集、淳和天皇の御代に經國集ができた。嵯峨天皇は特に詩文を好ませ給ひ、天皇の御代及びその前後には小野篁・僧空海を始め、淸原夏野・良岑安世・小野岑守・菅原淸公等が文名の高きを競うた。詩文に關する理論もおのづからこの間に發達を見、空海の文鏡祕府論は、詩論・文章論の先驅をなした。貞觀・寬平の頃には菅原是善・同道眞・大江音人・都良香・紀長谷雄・三善淸行等が著名であり、良香に都氏文集、道眞に菅家文章・同後集がある。

當代の後期に於いては、唐との國交が絕え、唐文化への憧憬も著しく減退

したため、詩文もおのづから國風を帶び來り、且つ貴族の榮華が募るにつれて、詩文もまた遊戯の對象となり、詩合せの如き遊びが行はれるやうになつた。官職の世襲化とともに、漢文學も菅原・大江二家の家業と定り、前期に於けるが如き盛大さは見られなかつた。しかしながら、なほ大江匡房・三善爲康・藤原明衡・藤原通憲等の如き大家が出で、匡房の江家次第、通憲の本朝世紀・法曹類林はその博學を見るべく、詩文集に爲康の朝野群載、明衡の本朝文粹が出た。

書道

漢文學に附隨して書道も大いに發達した。平安初期には盛唐の書風が流行したが、嵯峨天皇は特にこの道に優れ給ひ、橘逸勢・僧空海の名筆も世に稱へられた。延喜以後はやうやく唐風を蟬脫して、和漢その圖域を異にするに至り、小野道風・藤原佐理・同行成等いはゆる三蹟によつて優麗なる日本的書體が樹立せられた。殊に國文學の發展は、假名書の發達を促し、女性にふさはしい優雅な上代樣書風が成立し、後世假名書の範となつた。また、平安時代には料紙の如きも頗る美化せられて、金銀の切箔、砂子・野毛を置くものが行はれ、書風との美的調和が考へられた。

國文學

國文學は、奈良時代から漸次發達して來た假名の普及とともに異常なる發達を示し、平安時代文化の一大特色となつた。しかもその初期に於いては未だ漢文學に壓倒せられてゐた觀があつたが、貞觀・寬平の頃、在原業平・僧正遍昭・小野小町等が出て歌道の復活を圖つてから、隆昌の一路を辿り、ここに國風文學の昂揚を見るに至つた。かくて醍醐天皇の御代には古今和歌集の如き勅撰和歌集の編纂を見、ついで村上天皇の御代には後撰集が勅撰せられた。さらにそののち拾遺集の撰集が行はれ、ここに所謂三代和歌集が成立した。

和歌

當代の和歌は、前代萬葉の雄渾なる歌風を失ひ、徒らに優麗纖巧な表現法を重んじ、その技巧の末節に捉はれて實感のこれに伴なはざる弊を生じた。和歌の形式化とともに歌論が盛んとなり、公任の新撰髓腦の如き著述の出現を見た。又宮廷生活に於いて女性の教養が重んぜられた結果、和泉式部・赤染衞門の如き歌道にすぐれた才媛が輩出した。歌道隆昌の反面には、漢文學と同じくその遊戯的傾向も盛んとなり、歌合せの如き遊

が行はれるに及んで、和歌は一種の技藝と化した。

散文學

和歌と相並んで假名によつて散文をものすることが行はれるやうになり、平安時代の初期に於いて既に竹取物語・伊勢物語の如き小說が創作せられた。ついで大和物語・宇津保物語・落窪物語が現はれ、さらに紫式部によつて源氏物語の大著作が完成せられた。物語とともに假名で紀行・見聞等を記錄することも行はれ、紀貫之の土佐日記を始めとして、兼家の妻の蜻蛉日記、和泉式部の和泉式部日記、紫式部の紫式部日記、菅原孝標の女の更級日記等相次いで出で、清少納言の枕草子の如き隨筆も現はれた。

かくの如く國文學が多く女性の手によつて培はれ、いはゆる女流文學の誕生と盛行を見たことは、平安時代文化の一大特色であつた。

國文學の普及とともに漢字・漢文の和訓が必要となり、新撰字鏡・倭名類聚抄等の辭彙が編纂せられた。前者は僧昌住が寛平四年（一八九二年）に著すところであり、後者は源順が醍醐天皇の皇女勤子內親王の御修學に便するために編纂したものである。

この時代後期に入ると和歌では、白河天皇の後拾遺集及び金葉集、崇德上皇の詞花集・後白河天皇の千載集等勅撰の歌集が踵を接して出た。歌風も三代集時代の古風を墨守するもののほかに革新派が現はれ、歌論また頗る盛況を呈して勅撰集に對する批判がしきりに行はれた。

歷史物語

散文では狹衣物語・濱松中納言物語・夜半の寢覺・とりかへばや物語等が相次いで現はれ、源氏物語の作風に追隨した。特に注目すべきは榮華物語・大鏡・今鏡の如き國文による歷史物語の誕生である。當代の初期に盛んであつた漢文の官撰國史は、中期に入つて遂に斷絕したが、今や國文による私撰の歷史物語が現はれたことは、國文學と漢文學とその地位の更替を示すものである。歷史物語とともに、內外の逸事・奇聞を記した今昔物語が出て、前者とともに次代の軍記物語の淵源をなしたことも、この期國文學の一特色であつた。

平安初期の特色

四美術・工藝の發達　前代に於いて美術が佛敎を中心として發達したやうに當代に於いてもその初期に於いては、佛敎の美術に對する影響はなほ著

建築

しいものがあつた。建築に於いては、山嶽佛教が興隆した結果、從來の都市佛教に見られた左右均齊の配置が止んで、地勢に應ずる自由な建築法が創始せられ、塔にも下層方形、上層圓形の變化ある多寶塔が生れた。當代建築の遺構としては、大和室生寺の金堂と五重塔とがある。佛寺建築の影響は神社建築にも及び、曲線や丹塗が盛んに試みられるやうになり、春日造・流造の如き新形式を生じた。

彫刻

彫刻に於いても眞言密教の影響が著しく、前代のおほらかにして豐麗優美なるに代つて、壯重神祕の風を帶びるやうになつた。前記室生寺の釋迦如來及び如意輪像を始めとして唐招提寺の大日如來、觀心寺の如意輪觀音、廣隆寺の阿彌陀如來、神護寺の藥師如來・虛空藏菩薩などはその作品の代表的なものである。佛像彫刻の影響をうけて、藥師寺の應神天皇御像・神功皇后御像、松尾神社の男神像・女神像の如き、神像彫刻も行はれるやうになつた。

繪畫

繪畫も曼陀羅を始め儀軌の一定した佛畫が、崇拜の對象として用ひられるやうになり、且つ豪放壯麗な密教的表現をとるものが多くなつた。空海

鳳凰堂本尊　阿彌陀如來像

觀心寺　如意輪觀音菩薩像

平等院　鳳凰堂

高野山　阿彌陀如來二十五菩薩來迎圖

三佛寺　投入堂

醍醐寺　五重塔

筆と傳へられる東寺の龍智・龍猛の像、神護寺の兩界曼陀羅、高野山の勤操僧都像、高野明王院の赤不動、圓城寺の黃不動、西大寺の十二天像等は、その代表的なものである。僧侶以外の畫家としては、百濟河・成・巨勢金岡の名が傳へられてゐるが、遺作は存しない。殊に金岡は、唐風を棄てて大和繪を開いたと稱せられ、その子孫は、代々朝廷の繪所を司ることとなつた。

工藝

彫刻・繪畫の發達とともに工藝の進歩も著しく、仁和寺の三十帖冊子を納めた蒔繪筥、延曆寺の經函、興福寺南圓堂の銅燈籠等は有名な作品である。

平安中期の特色

平安中期に入ると、唐の影響よりの離脫とともに美術界は著しく日本化の傾向が強化せられ、且つ貴族の生活の奢侈化につれて、美術の指導的中心は宗教より俗界に移つた。かくて美的意識はますます洗練せられ、前期の壯嚴神祕の性格はやうやく一轉して、優美艶麗の方向をひたすら進み、遂にその極致に達するに至つた。

建築

建築では、貴族の住宅建築が大いに進歩し、家屋と林泉の調和を重んずる所謂寢殿造の形式が生じ、爾來貴族邸宅の一樣式となつた。寺院の建立も貴族の私願によるものが多く、中には貴族の別

莊化したものもあり、建築の樣式にも寢殿造が加味せられ、寺院建築の上にも日本的趣味が行はれるやうになつた。今日では賴通の建立にかかる平等院の鳳凰堂が殘存し、日本化し貴族化した往時の佛寺の形相を傳へてゐる。又一方神佛習合の大勢に伴なひ、神社建築の佛寺化が興り、鳥居の代りに樓門を起し、瑞籬の代りに廻廊を作ることが行はれた。日吉造・八幡造は、おほよそこの頃から始まる。

彫刻

彫刻は淨土教の興隆に伴なつて、阿彌陀佛の像が殊に多く製作せられた。このころ名工定朝出でて木彫を大成した。その代表作として現存するものは、鳳凰堂の本尊阿彌陀佛であつて、その平穩優美な面相には廣大無邊の慈悲を含んで、一切衆生攝取不捨の性質をよく具現してゐる。その他當代の傑作としては、法隆寺講堂の藥師如來、淨瑠璃寺の吉祥天等があり、いづれも艶美の相貌を呈し、藤原全盛期美術の特色をよく示してゐる。

繪畫

繪畫も日本化の傾向が極めて著しくなつた。巨勢家には名匠相次いで出で、大和繪の發展につとめたが、巨勢廣高と同じ頃に詫磨爲成が出て、鳳凰堂の壁・扉の繪を描いた。又惠心僧都によつて淨土教藝術が大成せられ、高野山に殘る阿彌陀如來二十五菩薩來迎圖の傑作は、彼の代表作と傳へられる。淨土教の繪畫は、前代に盛んであつた密教の畫の如く儀軌嚴ならず、形相が自由であつて、且つ山水を配してをり、ここにも畫風の日本化の一面を現はしてゐる。

工藝

工藝もまた彫刻・繪畫と等しくますます優美に洗練され、纖織・染色・金工・木工・塗工等いづれも華麗雅致を極めたものが製作せられた。また唐風は次第にすたれて純日本的なものが賞用せられ、貴族の裝束の如きも、男子の束帶・衣冠・直衣・狩衣、女子の五ツ衣（十二單衣）・小袿等の型が定つて、國風衣服が完成された。

平安末期の特色

平安末期になると、美術界はますます日本化と艶美纖巧の度を增してくるとともに、地方豪族の中央進出に伴なつて、地方文化との交流が行はれるやうになつた。

建築

建築では、院政といふ政治形態に卽應して勅願寺の建立が多く、また地方

に於いても豪族の勃興に伴なつて多くの寺院が建立せられた。東北に平泉中尊寺の金色堂・經藏・磐城に白水阿彌陀堂、山陰に伯耆三佛寺の投入堂・納經堂、山陽に播磨鶴林寺の太子堂、四國に土佐豐樂寺の藥師堂、九州に豐後富貴寺の大堂が殘存してゐて、獨り建築のみならず、彫刻・繪畫・工藝の地方傳播の情勢を物語つてゐる。嚴島神社の構造も平安貴族の寢殿造の影響が地方の神社建築に及んだ好例として注目される。

彫刻

彫刻には、畿内の法金剛院の彌陀、峰定寺の千手觀音、三千院の彌陀三尊、地方では尾張七寺の彌陀三尊、伯耆大山寺の阿彌陀像、土佐豐樂寺の藥師・釋迦・彌陀像等の名作があり、中にも中尊寺の一字金輪像は最も典型的のもので、佛像に多くの精巧な裝飾を施し、眼には玉を入れ、肌は肉色に染め、佛像の女性化、彫刻の繪畫化といふ當代末期の傾向を遺憾なく發揮してゐる。

繪畫

繪畫に於いては大和繪の傾向が鮮明となり、巨勢・詫磨兩派のほかに、新たに土佐派・春日派が起つたが、これらの大和繪の畫家によつて繪卷物の發展を見たことは注意すべきである。鳥獸戲畫・志貴山緣起・源氏物語繪卷・伴大納言繪卷等がある。なほ中尊寺や嚴島神社の經卷見返繪や、四天王寺の扇面形法華經冊子も當代繪畫の一斑を示すものとして注目される。四天王寺の扇面型法華經冊子には版刻繪として最古のものも含まれてゐる。嚴島神社の經卷は平家一門の寄進にかかり、見返繪の優麗にして裝飾的なるはもとより、各卷それぞれ意匠を異にした軸・緣金物・雲龍の金具を附した筥等、平安末期の工藝の粹を集めたものである。

工藝

平安末期の工藝品として特に注目すべきものに武具がある。武士の勃興は甲冑・刀劍の製作を盛んにし、從つてその技術は躍進的に進歩して、後世武家時代の武具の原型が大成された。日本刀の精錬は、古來より名高いが、この時代の末期に至つては海外にまでその精妙を知られて、日宋貿易品の中に數へられるやうになつた。その外裝の美は平安貴族の洗練された風尚の影響を受けて、鎧の縅に見られる配色の美とともに、武者の戰を華やかにした。

地方文化の

貴族文化の地方的進出とともに、地方文化の中央進出が始つた。新しい

興隆

刺戟を求めて止まぬ貴族はやうやく高尚優美に飽いて卑俗野趣に好奇の心を動かすに至つたのである。既に平安中期から猿樂や傀儡子・田樂等が都人の間に弄ばれた。田樂の野趣に滿ちた歌舞は、猿樂の影響を受けて奇拔滑稽を主とするやうになり、貴紳すらこれに加つて晝夜を分たず往來を踊り狂ふものがあるやうになつた。やがて武家の勃興とともに武家の生活や戰爭が文學や美術の對象として選ばれるやうになつたことは、貴族が武士の勇健素朴な生活に興味を持つやうになつたことを意味し、そこに頽廢した生活の振肅を求めた跡が窺はれる。

國風文化の成熟

五文化の日本的樣相　平安時代の文化は奈良時代の文化と同じく、貴族的でありながら、甚しく私的・主情的に墮した點は、後者の國家的・道德的性格を多分に有つてゐたのに比し、劣るものありと考へられるが、しかも奈良文化が異國文化の攝取に急にして未だ全く日本化するに至らなかつたのに對し、平安文化は珍にこれを同化して自家藥籠中のものとなし、ここに所謂國風文化を成熟せしめたことは、國民文化の展開途上に於ける一大業績であるとしなければならない。

平安文化のもつ日本的樣相について考へるとき、まづ當代文化が外國の影響によらず、全く日本獨特の政治的・社會的情勢の必要に應じて生まれたことが省みられなくてはならない。思想宗教の方面に於ける日本的樣相としては當代社會情勢に伴なうて淨土教の思想が發展して、遂に淨土宗の如き純日本佛教の確立を見たことを以て最とする。儒教・道教も、相當に行はれながら、それが敢へて日本の國民道德を犯し得なかつたことも特筆せられなければならぬ。文學の方面では、假名の普及及び國文學の絢爛たる展開があつた。この假名及び國文學こそ純日本的のものの展開として、平安文化の日本的樣相を代表するものといふも過言ではない。建築では寢殿造が大成せられ、彫刻では像の相貌・背景の日本化はいふまでもなく、その手法に木寄法が考案せられ、材料の如きも、日本に多い木材による彫刻のみが發展したことも日本的樣相の一端である。工藝に於いても、全く唐風を脫した純日本的な服飾・武具等が完成せられ、永く後世の規範となつてゐる。

文化的自覺

かうした文化の日本的樣相は日本人自身によつて強く意識せられ、文化がおのづから自主的性格を帶びた表現をとつてゐることは特に注意すべきである。かの六國史が、その書名に特に日本なる文字を冠してゐるが如き、またかの經國集が、詩文を以て國家經綸の要具と見んとする當代の意氣を示すためにこの名を附せられたるが如き、さらにまたかの源信が、日本に假名ある上は如來の金言なりとも假名を以て記すべきことを主張したるが如き、いづれも日本文化の特殊的性格の意識によつてその存在理由を主張しようとする自主的態度の顯現とみることができる。

日本文化の海外進出

かかる平安文化の自主的態度は、さらに日本文化の優秀性の自覺となり、進んでは海外敎化の要請となつて顯現した。醍醐天皇は、入唐僧に託して、日本的書道の確立者たる小野道風の書を彼の土に傳へしめられ、源信は、自著の往生要集竝びに先師慈恵大師の著觀音菩薩讃と、慶滋保胤の作十六相讃・日本往生傳・源爲憲の法華經賦を支那の天台山に送つて、彼の土の僧侶に敎を垂れ、後三條天皇の御代、入宋した成尋は、その紀行に常に大日本の文字

眞如親王御畫像

平家納經（法華經功德品）

を用ひ、彼の國人に對して大いに我が國體の尊嚴と國運の隆昌とを說いてゐるなどは、いづれもこの思想の現はれである。また我が文化の優秀性は獨り日本人によつて一方的に主張せられたのではなく、客觀的にも承認せられたのであつて、源信の往生要集を讀んだ支那人が、尊信の心やみ難く、その影像を求めてこれを奉祀したことや、白河天皇の御代、高麗王が日本醫道の優秀なことを聞き、使を遣して良醫を求めたことなどは、それを證するものである。

扇面形法華經冊子

伴大納言繪詞

鳥獸戲畫繪卷